

古代エジプト社会における教育について

— 知識ネットワークの核としての神殿 —

大 城 道 則

は じ め に

I. 古代エジプト人にとっての高等教育

II. 生活防衛手段としての教育

III. 知識の核としての神殿

お わ り に

キーワード：エジプト，神殿，教育

は じ め に

我々が古代世界の教育¹と聞いて、最初に思い浮かべるものは、スパルタ教育、あるいはソクラテスやプラトンに代表されるギリシア哲学という言葉であろう。西洋古代の教育史を扱う書物の始まりは、いつも古代ギリシアのアテナイやスパルタからである²。それ以前の文化・文明の教育について詳細に触れられることはほとんど無い³。その主な原因は、ギリシア世界と比較した際の他の古代文明・古代文化における資料の乏しさにある。一般的に古代世界における教育は、研究者たちによってこれまで文字資料を中心として研究がなされ、再構成されてきたからである。その一方で近年、暗誦や口伝などのオーラルなものや儀式や儀礼などの体現的なものにも目が向けられつつある⁴。このような新しいアプローチの方法は、ある一定の状況下では極めて有効な手段となるであろう⁵。しかしながら、現代世界とは時間的隔たりが大きい紀元前3千年紀や2千年紀の歴史を扱う場合には必ずしも有効とは言えない。

このような状況の中、古代エジプトは他の古代世界に誕生した文化・文明とは一線を画する。極めて古い段階から、文字体系が発達していたエジプトは、古代ギリシアやローマに匹敵する、あるいはそれ以上の教育に関する情報を持っていると言えるからである。しかしながら、これまでその教育については部分的な紹介がなされてきたに過ぎない。そこで本論では古代エジプト社会における教育というものを多角的に捉え、当時の状況を少しでも明らかにすることを試みる。

以下、第Ⅰ章では、古代エジプト人にとっての高等教育とは如何なるものであったのかを具体例を挙げつつ述べ、庶民出身の書記の形成過程について考察を加える。第Ⅱ章では、古代エジプト人の教育に対する姿勢と目的について、文学作品中に書かれた内容を考察しつつ述べ、識字率の問題にも触れる。第Ⅲ章では、知識の源であった古代エジプトの神殿のネットワークとそれが創り出す「教育の場」というものが、古代エジプト文明のアイデンティティーの一例であることを指摘する。その結果として、古代エジプト文明の終焉とは、最後のエジプト人王ネクタネボⅡ世の死去、あるいはクレオパトラ7世の自殺とするのではなく、古代エジプトの神々を祀った神殿の閉鎖こそが古代エジプト文明の終焉であることを確認する。

Ⅰ. 古代エジプト人にとっての高等教育

古代エジプト人たちにとっての教育とは、社会の中の道徳、倫理、知識、技術、あるいは宗教観などを子供たちに施すことであった。プトレマイオス朝期に編纂された「インシンガー・パピルス」Insinger Papyrusには、人の一生について次のように書かれている。

「人は死と世を理解する以前の子供として10年間を過ごす。人は生きていくための教育を身に着けるために次の10年間を過ごす。人は生きることにより財産を得るために次の10年間を過ごす。人は心が相談相手となる以前に老年に至るまでの10年間を過ごす。そして人にはトト神が聖人に与える全人生の内の60年が残っている。」⁶

ここでも教育は、古代エジプト人たちにとっての人生の重要な要素であったことがわかる。通常は両親が隷と世襲の職業のための教育を行った。教育が施される場合、男子は父親によって、そして女子は母親によって行われるのが常であった。特に社会生活における秩序や正義、そして勤勉などの道徳的要素が重要だとされていた。しかしながらそれ以上の具体的な教授方法やその内容についてはほとんどわかっていない⁷。このような状況の中、我々は古代エジプト特有の教訓文学⁸と呼ばれている作品中に古代エジプトにおける教育の一端を見ることが出来る。例えば新王国時代の初頭に書かれたと考えられている「アニの教訓」(図1参照)⁹の中では「怠け者は全てを失う」、あるいは「他人の財産をあてにするべきではない」というような人生における助言が述べられている¹⁰。



図1：アニの教訓

(R. O. Faulkner et al, *The Egyptian Book of the Dead* (Hong Kong, 1994), plate. 2.)

アニは書記の中でも下級の神殿就きの書記であったため、彼によるこの教訓は、比較的庶民に近い中流階級の下層にあった人々の道德観・倫理観と受けとめることができるかもしれない。同じく教訓文学の「アメンエムオペの教訓」の中には、人々の物欲を戒めるための言葉として、「貧者の財産を欲しがらな。彼のパンを欲しがらな」、「もし不正行為が発覚したならば、彼が次なる仕事の機会に派遣されることはないであろう」、あるいは「あなたの心を富に向けるな」などと記されている¹¹。この「アメンエムオペの教訓」の中では、国民全員が認識すべき道德観・倫理観についても次のように詳細に繰り返し述べられている。

「法廷では人を困らせてはいけない。正しき人を排除するな。白衣（身なりの良い）の人に同意するな。襁褓を纏う人を拒絶するな。権力ある者の贈り物を受け取るな。彼（権力ある者）の目的のために弱者を抑圧するな。マアト（正義・秩序）は神の大いなる贈り物である。彼（神）はそれを望む全ての人々に与える。彼（神）と良く似た彼の力は貧者をその苦痛から救うであろう。あなた自身のために偽造文書を作るな。それらは死に値する重要問題であるからである。」¹²

またこのような教訓文学は、人々の道德観・倫理観を明確に意識させるためだけではなく、日々の幸福とはいかなるものであるのかを人々に明示するという側面も備えていたのである。例えば「幸福感と共にあるパンは、悩み事と共にある富に勝るものである」などという一節は現代世界に暮らす我々の心にも十分響くものがある。

このような一般教育とは別に古代エジプト社会では、少年たちに高等教育が施される場

合があった¹³。古代エジプト人たちにとっての高等教育とは、基本的に文字の読み書き、そしてそれに伴う計算能力を習得することであった¹⁴。上流階級に属する少年たちは、幅広い教育を受ける機会に恵まれていた。それ故に官僚になる者には自然と上流階級の人々が多かった。しかしながら、その一方で庶民の子弟にも高等な教育を受ける門戸は開かれていた。もし親が望めば、そして学校の月謝を支払うことが可能であれば、公的な教育を受けることが出来たのである。月謝は農作物などの現物で支払われていた。庶民が代々続く職業の世襲制から抜け出すためには、エジプトの国家行政に携わる官僚になることが最良の手段であったのである。そして数ある官僚の中でも書記が最も身近な存在であり、人々に賞賛されていた。このことはエジプトで全王朝時代を通して、座し仕事する書記の姿を表す彫像が数多く作られたことから明らかである (図 2 参照)。



図 2 : 書記像

(H. D. Schneider (ed.), *Rijksmuseum van Oudheden* (Leiden, 1981), p. 57.)

書記には王命を記録する者を筆頭に、地方の行政の末端部に至るまで明確な序列が存在していたようである。古代エジプトにおける書記の主な仕事とは、王家や神殿の代理人として農民から税を取り立てたり¹⁵、神殿の財産の出納を管理することであった。古代エジプトの行政機構を支えた彼ら書記たちは、いったいつ頃から権力を持ち「アニの教訓」や「アメンエムオペの教訓」に見られるような社会秩序に則って職務を遂行し始めたのであろうか。

書記という肩書は既に第一王朝期にエジプトに現れており¹⁶、その後もレリーフ上にあるいは彫像として描かれた。例えば書記は、エジプト最古の葬祭文書であるピラミッドテキストの中で次のように表されている。

「書記よ、書記よ、あなたのパレットを叩き壊し、筆を折れ、そして文書を引き裂け。ラー神よ、彼を彼の場所から追い出し、代わりに私を彼の場所に据えよ……。」¹⁷

また上述した二つの教訓文学の成立時期から考えると、エジプトにおける庶民にとっての書記の重要性は、新王国時代には既に認識されており、新王国時代の後半には一定の社会秩序が成立していたことがわかる。それ以前の社会状況について記載されている史料としては、「メリカラー王への教訓」が挙げられるであろう。第一中間期に存在したヘラクレオポリス朝の王であったケティ3世が後継者のメリカラーに与えたものという形で伝わる教訓文学である。この「メリカラー王への教訓」には、古王国時代を基盤として次の時代であった第一中間期終盤に明確に古代エジプト社会に現れた新しい価値観が見られるとされている¹⁸。例えば「メリカラー王への教訓」に描かれた庶民に対する描写には、「生れの良い者と庶民とを区別するな。能力によって人をとりたててやりなさい」¹⁹などという言葉があり、このこと自体は王権や貴族の力の衰退を表していると言えるのであるが、同時に平等主義に伴う官僚主義の徹底の現れとも捉えられるであろう。古代エジプト社会における新しい価値観の出現である。

第一中間期後の中王国時代に入ると「メリカラー王への教訓」の中に見られた新しい価値観がさらに具体性を帯び明確となる。一般的に中王国時代第12王朝の王センウセルト3世の時代は、中央集権が確立し、官僚制が整備された時代として知られている。彼の治世の間に、地方の領主たちはその特権、つまり特定の称号を持つことや豪華な岩窟墓の建造などの特権を失った。そして、行政のトップである宰相が国の全ての行政区画と行政組織とを直接その手中に置き、特定の部局や官僚が独断で行動することを防ぐために、全ての仕事に複数の人が関与するような制度が採用された。この制度により、全ての最終決定権が宰相の元にもたらされた。宰相は王に対してのみその責任を負うことにより、高度に中央集権化された官僚制度が完成したのである。このことにより、巨大なピラミッドが造られた古王国時代以上にエジプト王の権力は強力になった。

このような官僚制を根底から支えたのは、新しい社会秩序のもと、旧来の地方貴族に代わって、台頭してきた庶民階級出身の官僚たちであった。官僚、つまり書記となり出世するためにはまず、行政文書を扱うために読み書きの能力が必要とされた。しかし裏を返せば、読み書きさえできれば、努力さえすれば書記になる道が開けていたのである。書記は

以前にも増して重要性を帯びるようになる。全王朝時代を通じて書記の職業は、父親からその息子へと世襲されることが多かったが、庶民が国家の行政機構の中に入り込む機会が僅かでも生まれたことは画期的なことであった。特に古王国時代以降、王家の子息たちと共に養育されるために、様々な家柄の少年たちが選ばれた²⁰。彼らは将来的には未来の王の取り巻きとなっていった可能性もある。また文字の習得を容易にするための一つの政策として文字数を限定し、綴りかたを統一したことも知られている。このことは国が積極的に庶民に教育を受けることを勧めたものとも受け取れるであろう。その結果として、王は国政に口出しする地方の有力者の影響を徐々に無くし、庶民の子弟に教育を施すことで、国家に有益な全く新しい社会層を形成していったのである。同時に王は幼少期を共に過ごし学んだ人物を国政を司る重要な地位に就けた。この時期は、これまで出世の道が閉ざされていた人々に広く機会を与えたという側面が強調されがちではあるが、そのことは同時に王が自由に振舞える環境を作り出すことにもなったのである。

II. 生活防衛手段としての教育

古代エジプトと他の古代文明との差は、文化水準の高さと庶民の教育に対する関心にあった。古代エジプト人の教育に対する姿勢は、書記の養成学校において教科書として用いられていた物語「ドゥアケティの教訓」の中で象徴的に述べられている。この物語はドゥアケティという名前の一庶民が、彼の息子ペピを書記の養成学校に入学させるために都へ向かう道の途中で語った話である。ドゥアケティは息子のペピに次のように語りかける。

「私は鞭で打たれた人を見たことがありますよ。あなたは心を書物に向けるべきです。労働者として連れ去られた男を見てみなさい。見なさい、書物に勝るものはない。それらは水面に浮かぶ船であるからだ。」あるいは「見なさい、書記以外には監督者の居ない職業はない。なぜなら書記が監督者であるからだ。」²¹。

このように父親のドゥアケティは息子に向かって、いかに書記が素晴らしい職業であるのかを説いたのである。さらに息子に言い聞かせるために、ドゥアケティは書記という職業がどれだけ素晴らしいものであるのかを、考えられる限りのあらゆる他の職業を比較として持ち出し、下記のごとく説明を加え息子に目指すべき道を説いたのである²²。

「私は溶鉱炉の戸の所で働く銅細工師を見たことがある。彼の指はワニの爪のようであり、腐った魚よりも悪臭を放っている。」

「手斧を持つ全ての大工は農民よりも疲れ果てている。彼の職場は彼の森であり、彼

の鍬は斧であるからだ。彼の仕事には終わりが無い。精一杯働かねばならない。夜も灯りをともして働く。」

「宝石細工師はビーズとして糸を通すために、あらゆる種類の固い石に孔を開ける。護符の象嵌を仕上げた時、彼の忍耐力は消え失せ、疲れ果ててしまう。彼は日没まで膝と背中を曲げたまま座っている。」

「床屋は夕刻を過ぎても髭を剃っている。しかしながら、彼は早起きしなければならず、彼は腕に鉢を抱えて叫ばなければならない。彼は自ら髭を剃る人を求めて通りから通りへと動き回る。」

「陶工は生きてはいるが、地面の下に暮らしている。彼は煮炊き用の壺を焼き上げるために豚よりも深く地面に穴を掘る。彼の服は泥でゴワゴワし、彼の被り物はボロボロである。そのために焼けた溶鉱炉からもたらされる空気は彼の鼻へと入り込むのだ。」

「庭師は天秤棒を担ぐ。彼の両肩は年齢という重荷を負う。腫れ物が彼の首にでき、それは化膿している。彼は朝に葱に水をやり、日中椰子の果樹園で過ごし、夕方はコリアンダーに水をやる。そのために彼は他の職業の誰よりも早く衰え死ぬことになる。」

「農民はホロホロ鳥よりも泣き叫ぶ。彼の声はカラスよりも大きい。彼の指は酷い悪臭を放ち爛れている。」

「漁師についても話そう。ワニの暴れまわる川で働く彼は他のどんな職業の人よりも悲惨である。」

ドゥアケティが彼の息子に話して聞かせた以上の内容から考えると、古代エジプト社会が教育を重要視した最大の理由は、教育が社会における出世の手段であり、庶民の子供たちにとっては特権階級に入り込む最大の機会であったからに他ならない。そのために親も必死になったのであろう。例えば名も無き庶民の子供であったとしても、書記になることが出来たならば高級官吏にまで出世する道が開かれていたのである。そして彼の一族もまた恩恵を受けることになる。例えば第6王朝の官吏であったウェニは、庶民出身であったにもかかわらず上エジプト長官の地位に就き²³、第18王朝のセネムトはハトシェプスト女王の大家令にまで出世街道を駆け上る。「ドゥアケティの教訓」は、中王国時代の作品と考えられていることから、少なくともそれ以前に相当するウェニの生きた古王国時代後半、そしてそれ以後のセネムトの新王国時代に渡り、エジプトにおける教育は庶民たちにとって最重要課題の一つであったと思われる。実際、古王国時代には王宮を除けば学校の存在は明確ではなく、第一中間期から知られるようになる²⁴。

それでは実際に当時のエジプトの教育水準はどの程度であったのであろうか。その特徴的な美術様式や高度な文字の発展、あるいは宗教観や建築などから、古代エジプトの文化

水準は同時期のあるいはそれ以降の文化・文明と呼ばれる地域よりも相当高かったことに異論はないであろう。その数あるエジプト文化の特徴の中でも多文化と一線を画するものが、ヒエログリフと呼ばれている象形文字である。古代エジプトの文化が数千年の時を超えて後世に伝わったことは、この文字の存在に因るところが大きい。次に本章ではその文字に注目し、古代エジプトの教育水準というものについて考えてみたい。

その国の教育水準を知る一つの目安として識字率がある。教育に文字を伴わない文化が必ずしも文字を持つ文化よりも劣っているとは考えないが、識字率の増加は初等教育の普及と連動しているとも言える。シュメール人によって楔形文字が、エジプト人によってヒエログリフが、そしてフェニキア人によってアルファベットなどの文字が発明されて以来、人は物事を記録・継承出来る手段を持つようになった。「読めない者は浮かばれぬ」という古代ギリシアのアテネの諺が示すように²⁵、アテネ市民の多くは読み書きを重要視していたようである。またギリシア世界で流通していた壺絵にパピルスの巻物を読んでいる場面が描かれていることから (図3 参照)²⁶、文字を読むという行為がアテネ市民に認識されていたと言えるであろう。



図3：パピルスの巻物を読む光景
(N. Lewis, *Papyrus in Classical Antiquity* (Oxford, 1974), plate. 8.)

紀元前5世紀頃にアテナイで文字の使用は急速に普及したと考えられている²⁷。ヘレニズム時代に入ると、プトレマイオス2世フィラデルフォスによってアレクサンドリアに、そしてアタロス1世によってペルガモンに数十万巻の書物を備えた巨大な図書館が建造さ

れる。しかしながら、それらは庶民あるいは市民レベルで利用されていたとは言いがたく、どちらかと言えば極少数の文学者や哲学者が作業する場であり、また王家の権力を外部世界に誇示するためのものであったと言えよう。とは言え、知識・情報の蓄積が行われた一つの知的装置として図書館は、その周辺地域において、そして後の時代において重要な役割を果たした²⁸。

このような状況に対して、古代ローマ帝国下に暮らしていた人々は、比較的読み書きが出来たものと考えられている²⁹。当初、書物を読む習慣は上流階級の私的な習慣に過ぎなかった。しかし東地中海世界から戦利品の一つとしてローマにもたらされた書物は、私人の図書室に所蔵され、その周りに教養のある人々が集まって来たのである。帝政期に入ると、ローマ帝国の巨大な流通網に乗り、書物と読書の習慣は広まり、識字率は格段に上がったと考えられる。例えば南イタリアのポンペイの街角には、選挙宣伝用の広告や住民たちの手による落書きが数多く残されているし³⁰、書簡の遣り取りや文字の掘り込まれた貨幣も普及していった。ポンペイと同じく南イタリアに位置していたヘルクラネウムからは、約800本ものパピルスの巻物が発見されている³¹。また古代ローマの風刺小説として知られる『サテュリコン』の中でも、主人公のエンコルピウスが訪れたトリマルキオの邸宅の門柱に、「主人の許可無くこの玄関扉より外に出た奴隷は、全て百回の鞭打ちの刑に処す。」と記されていたという件がある³²。しかしながら、ローマ帝国の衰退と共に文字は、一部の貴族や官僚、宗教者、そして彼らの要望を叶える商人たちのものとなっていった³³。

中世におけるヴェネツィアやジェノヴァなどのイタリアの商人、あるいはフィレンツェのような例外はあったが³⁴、中世以降、基本的にヨーロッパ世界に暮らす庶民の識字率は国によって偏りはあるものの最近まで比較的低かったと言える。例えば11世紀のフランスのある人物は、司祭たちについての苦情を以下のように述べている。

「私は司祭のことで苦しむ心の悩みをあなたに特に打ち明けたい。実際、司教たちの怠慢と無気力の結果、今日司祭たちは文字を全く知らず、読んでいることを理解しないばかりか、初歩的なものさえ綴りをひとつずつ追いながら、口ごもるのが精一杯である。」³⁵

このような例とは対照的に、キリスト教の布教に伴い識字率が上昇したという指摘もある³⁶。確かに初期キリスト教時代から中世にかけて、教会や修道院を中心とした写本活動は文献伝承としての一定の成果を挙げたと言えるであろう³⁷。またルネサンス期には、聖職者のみならず、貴族や商人にまで読み書きの能力が拡大・浸透していった。しかしながら、高度な教養に接する機会の多い上流階級と庶民とでは、実際には大きな開きがあった

と言わざるをえない。トマス・モアは16世紀初頭、「全国民の10分の4を遥かに超える人々が、今なお英語を読むことが出来ない。」と著書の中で触れているが、実際にはさらに識字率は低かったと思われる³⁸。社会におけるこのような階層別の識字率の差を明確に表した研究がD. クレッシー Cressy によってなされている。彼によれば、1580年から1700年にかけてのイングランドにおいては、重労働業者の73%から100%が、そして農村手工業者の56%から68%が読み書きが出来なかったという研究結果が出ている³⁹。あるいは1686年から1890年に架けての5年間において、フランスで婚約した人々の約75%が自分の名前をサインすることが出来なかったことが記録されている⁴⁰。しかも自筆のサインをすることが出来た約25%の人々も読み書きが出来たという保証は無いのである。またユネスコによる調査によると、1850年当時のアメリカに住む白人の識字率が約90%であったのに対して、ロシアの成人の識字率は約10%に過ぎなかった⁴¹。ただし18世紀末のロシアはピョートルによる西欧化政策により、西欧的な教養を身に着けた上流階級とほとんど西欧文化の影響を受けることなく暮らしていた庶民との間に社会的不均衡が生じ、両者は異なる言語で話し異なる文化に属していたとまで指摘されていること⁴²、あるいはクレッシーによる識字率についての研究成果では、1850年におけるイングランドにおいては、約30%の男性と約50%の女性が読み書きが出来なかったことが指摘されている⁴³。これらのことからユネスコの調査結果を批判無く受け入れることが出来ないことも事実である。

現代世界においても問題は深刻である。ユネスコの調査によると、1970年のアフリカにおける文字を知らない人の割合は74%となっている⁴⁴。ただしル・ロワ・ラデュリの調査によれば、16世紀末のフランスのナルボンヌ地方における商人と中産階級の識字率は90%以上という高い結果が出ているため、例外も考慮に入れておかなければならないであろう⁴⁵。いずれにせよこれまでの人類の歴史の中における庶民とは、社会システムに積極的に組み込まれてこなかった存在であったため、彼らの識字率を正確に測定することは容易な作業ではない。このことは測定可能な史料が後世に残る可能性が極めて低いことにもその主たる原因がある。アラン・コルバンによるルイ＝フランソワ・ピナゴを追った試みのような成果もあるが⁴⁶、過去における一庶民の実生活を明らかにすることは困難なのである。

それでは古代エジプトの状況はどのようなものであったのであろうか。古代エジプトにおいて文字は2000年以上に渡り使用され続けた(図4参照)。

時代	初期王朝時代	古王国時代	第1中間期	中王国時代	第2中間期	新王国時代	第3中間期	末期王朝時代	ギリシア・ローマ期	ビザンツ期
ヒエログリフ										
ヒエラティック										
デモティック										
コプト語										
ギリシア語										

図4：古代エジプトにおける文字の変遷

(J. Baines, Literacy and Ancient Egyptian Society, *Man* 18-3 (1983), p. 573-fig. 1を参考に作成)

初期王朝時代前の先王朝時代に既に出現していたヒエログリフは、時代によって文法的に、そして形態的にも徐々に変化して行った。大きく分けると、古王国時代に使用されたものは、初期エジプト語、古王国時代終盤から使用され始めたものは中期エジプト語、そして新王国時代から使用され始めたものを後期エジプト語と呼んでいる。ヒエラティックは、別名神官文字とも呼ばれているものである⁴⁷。ヒエログリフの崩し字、つまり草書体の一種に相当し、ヒエログリフと同じくらい長期間使用され続けた。民衆文字と訳されるデモティックは、少なくとも第26王朝までに主な用途がヒエラティックに取って代わったが、紀元後に行政文書など国政に関わる文書がギリシア語のみで書かれるようになり、使用されなくなっていった⁴⁸。コプト語はギリシア語のアルファベットを改造し、それをを用いて表現されたエジプト語の最終段階のものである。コプト語は現在でもコプト教会の儀式用で使用されている言語でもあり、キリスト教会を通じヌビアのメロエ文字にも影響を与えた⁴⁹。このように古代エジプトにおいて文字の使用が停滞したことはなく、図4に見られるように、特にヒエログリフやヒエラティックは、ほぼ全王朝時代を通して使用されていたのである。

J. バインズ Baines は、古代エジプトの正確な識字率を導き出すことは難しいと考えているが⁵⁰、その一方で、古代エジプトには数多くの物語文学が存在し、詩歌が詠われ、そしてそれらが文字史料として残り、現代にまで伝わっている⁵¹。古代エジプト社会における識字率は、全人口の1%未満⁵²あるいは0.4%程度であったと試算されている⁵³。ロー

マ時代やそれ以降の時代と比較すると識字率は低いと言えるかもしれない。古王国時代の人口が約100万人程度であったと考えられているので、当時約1万人のエジプト人のみしか読み書きが出来なかったという計算になる。しかしながら、古王国時代のマスタバやピラミッドの建築に用いた建材に落書きがなされていたり、また新王国時代の集落遺跡デイル・エル＝メディーナからは、その試算結果に疑問を投げかけるほどの大量の文字史料が出土している。職人集落という特殊な性格を持っていたデイル・エル＝メディーナからは、手紙や詩歌だけではなく、仕事上の記録など当時の庶民の生活を窺がわせる文字資料が得られた。つまり、デイル・エル＝メディーナに暮らしていた人々は、押し並べて教養が高く、当時教育の枠の外に居た女性たちですら、文字の読み書きが出来たという可能性を示唆しているのである⁵⁴。M. ビアブライヤー Bierbrier によって、少なくともデイル・エル＝メディーナに暮らしていた大半の男性は、ヒエラティックを用いて読み書きが出来たと指摘されている⁵⁵。このように古代エジプトでは部分的にはあるけれども、当時の社会状況と時代性を加味すると、本来読み書きに縁が薄いはずである庶民の識字率が、例えば中世ヨーロッパ世界と比べると比較的高いものであった可能性が考えられる。これまで述べてきたように、行政システムとして文書主義が確立していく中で、古代エジプトの庶民の識字率や計算力は、庶民レベルの人々の生活を防衛する大切な手段となっていく。もし子供が優秀であり、親に授業料の支払い能力があれば、身分の差無く教育を受けることが出来たからである。そしてその先には自力で成功を掴む道が開かれていたのである。書記あるいは書記になろうと文字を学んだ人々という存在が古代エジプトに新しい知識階層というものを産み出したのである。逆説的に言えば、識字率が低かったからこそ、文字を学べば成功が約束されていたとも言えるであろう。究極的には、無名の家柄から教育を武器に出世の道歩んだハトシェプスト女王の大家令セネムトの例のように、あるいはアメンヘテプ3世の側近となったハブの息子アメンヘテプのように⁵⁶、読み書きは国の政治に関わるために必須のものとなるのである。

Ⅲ. 知識の核としての神殿

本章では古代エジプト社会における文化伝達機関としての神殿を中心としたネットワークに着目する。神殿とは本来、神々への奉仕や祈願のために都市の中心機能として存在し、その文化・文明にとって神聖かつ象徴的なものであった。俗世界と隔絶された神殿は、一つの神聖なる小宇宙を形成していたとも言えよう。特に古代エジプトにおける神殿は、その構造上の特徴のため他の古代世界の神殿とは異なっていた。建築的特徴という観点から見ると、古代エジプトの神殿は、大きく三つの部分に分けることが出来る。神殿へのアプローチは、まず入り口である巨大な塔門から始まる。そこを入るとすぐに天井を持たない

中庭が出現する。さらに中庭を進むと次に沢山の円柱が立ち並ぶ列柱室が現れる。さらにその先には、神々の像が供えられた神々しい至聖所が存在しているのである。入り口から奥へと進むに連れて外光が遮られていき、否応無しにも神聖な雰囲気を作り出す。恐らく訪れた人々に対して、精神的効果を狙ったものであろうと考えられている。以上のような構造を持っているのが典型的な古代エジプトの神殿である。宗教的側面を重視し、システムチックに考えられ、作られていたことがわかる。

しかしながら、その一方で古代エジプトの神殿は、一般的に神殿が備えている神々と人間とを媒介するという宗教的側面だけではなく、自らが土地や交易用の船を持ち、療養用施設、そして付属の教育機関としてペル・アंक、つまり「生命の家」と古代エジプト人たちに呼ばれていた学校や図書館を備えるという実際の側面も備えていた⁵⁷。古代メソポタミアの神殿が祭祀だけではなく周辺地域を巻き込んだ市場の役割をも同時に果たしていたのと同様に⁵⁸、古代エジプトの神殿もまた行政や経済、そして教育の中心でもあった。特に神殿内に設置されていた「生命の家」、つまり教育の場の存在は、古代エジプトの叡智を養うために必要不可欠なものであった。この神殿という古代世界における巨大なシンクタンクを核とするネットワークを介して、古代世界の中でも最高レベルの文化と知識とを保持していた古代エジプトは、本論でこれまで述べてきたように、庶民レベルでさえも教育に関心を持っていたことが知られている。そして最終的にはその叡智、例えば科学（数学・医学）、宗教（イシス信仰・セラピス信仰）、美術（ポンペイ壁画⁵⁹・カノポス庭園⁶⁰）は周辺地域へと拡大していったのである⁶¹。

それではその叡智を生み出した「生命の家」とはどのようなものであったのであろうか。「生命の家」は、本来祭祀に関係する宗教文書や神話文書などの聖なる書物が保存されていた神殿の付属施設であった⁶²。「生命の家」は、エジプトの主要な都市に複数存在していたと考えられている。読み書きを始めとして、神学、天文学、医学、美術、数学などを学ぶ学問の中心地となり、現代の大学のような役割を持つようになっていった。特に天文学は、暦を生み出し、また天体の動きに合わせて神殿のような公的建造物の向きを正確に設定するために役立った。このような施設であったため、時代が経つに連れて当然のことながら外部世界へとその評判が拡大して行ったのである。異民族であるアケメネス朝ペルシア支配下のエジプトにおいてさえも「生命の家」の存在は広く知られていた⁶³。エジプト外部の人々の中でこの「生命の家」に対して最も敏感に反応したのは古代ギリシアの哲学者たちであった。プラトンは13年間、そしてピュタゴラスは22年間もの間エジプトに滞在し、「生命の家」で幾何学や天文学などを学んだと伝えられている⁶⁴。

エジプトの子供たちは、通常10歳くらいから家業を継ぐために職業的な訓練を受け始めた。国政・行政の中で出世を目指す子供たちは4年間小規模な村の学校に通った⁶⁵。授業に

おける基本的な作業は、模範となる「ケミィトの書」⁶⁶などを木製の板やオストラカに書き写し、暗記することであった。また当時の国際語であったアッカド語を学んでいた可能性も指摘されている⁶⁷。ヒエログリフを学ぶ前により使用頻度の高いヒエラティックが習得された。入学試験や進学試験が存在したのかは明らかではないが、彼らの中でも優秀な者は14歳になると医者や書記を目指すために神殿へと送られたのである⁶⁸。しかしながら、「生命の家」を代表とする教育施設で学ぶことができるのは男子に限られていた。ただし女性が軽んじられていたというわけではない。古代エジプト社会における女性の地位は決して低いものではなかったからである。幼い頃から母親によって家事の方法や情操教育が施されていたことが知られている。上流階級の少女たちは歌や舞踊を学び、中には読み書きが出来る者もいたようである。例えばハトシェプスト女王の娘であったネフェルウラーは、セネムトに教育を受けていたことが知られているし、アクエンアテン王の娘メリトアテンが使用したとされる文字を書くためのパレットが発見されている⁶⁹。女性の中でも特に母親は社会の中で敬われるべき対象であった。例えば「アニの教訓」には母親について次のように述べられている箇所がある。

「あなたが母親に与える食べ物を二倍にし、彼女があなたに尽くしてくれたようにしなさい。彼女はあなたという重荷を持ったが、見捨てるようなことはなかったからだ。数カ月後にあなたは生れたが、なおあなたに束縛され、三年の間、その胸はあなたの口の中にあつたのである。あなたが成長し、あなたの排便が不快なものであつたとしても、「いったいどうすればいいの」と毒づくことも無かつた。彼女はあなたを学校に送る時、そして読み書きを学ぶようになった時にも、家にあるパンとビールを持たせ、彼女はあなたを日々見守り続けたのだ。若い時に妻を娶いなさい。そして家庭を持った時には子供たちに気を配り、あなたの母親がしてくれたように子供を育てなさい。あなたが彼女に咎められるようなことはしてはいけぬ。彼女が彼女の手を神に向かつて差し伸べることはないように、そして神が彼女の嘆きを聞くことがないようにしなければならない。」⁷⁰

このことにより、古代エジプト社会において子供が正義・秩序・道徳に従い、正しく育ち生きていくためには、母親の力が必要不可欠なものであつたと認識されていたことは明白である。そして軍人の夫が読み書きが出来ない場合には、妻である女性の方が読み書きを行った例も知られている⁷¹。「アムンの神妻」God's Wife of Amunのようなエジプトの政治行政に影響力のある肩書を持つ女性たちの存在も知られている⁷²。いずれにせよ子供が読み書きを習得し、出世の道を歩むには家族による援助と理解とが必要であつた。また

子供たちを叱咤激励し、その道へと誘うために教訓文学の果たした役割は大きい。例えば次に挙げる書記を賛美・賞賛する言葉には、子供たちの将来を考え鼓舞する親心が見て取れるであろう。

「書記になるがよい、よくよく心せよ。おまえの名も同じような運命をたどるように。刻まれた墓石や丈夫に建立された祠堂の壁などより、一冊の本の方がよほどためになるものなのだ。」⁷³

「一日中指で書き暮らし、夜は夜で読書をするのです。友達と同じようにパピルスの巻紙と筆記用具を携えるのです。それはシェデフ酒よりも快いものです。書くことはといえば、それはその道を心得ている者にとっては、他のいかなる職よりも利益あるものなのです。」⁷⁴

このように古代エジプト社会において、書記を目指す高等教育というものは身近な存在であり、常に人々に賞賛されるべきものであった。また同時に古代エジプト社会は、庶民階級を自動的にその中枢部から切り捨てることも無かったのである。最低限の資格さえあれば誰もが教育を受ける場に参加することが許されており、その上、努力次第で行政の中枢に入り込むことが可能であったという特徴を持つ社会こそが、古代エジプト社会なのであった。

知識の源であった神殿のネットワークを基に、人と共に情報や物が移動することによって、神殿の中核から離れている一般庶民の生活空間の中に教育の場が作り出された。エリートコースから外れてしまった庶民が地元に戻り人々に知識や情報を伝えた場合もあったであろう。このような場の形成が古代エジプト人の中でも大多数を占めるいわゆる庶民レヴェルの人々の性格形成および精神形成に深く大きな役割を果たしたのである。神殿とそのネットワークの発達には、地域性を超えて共通した書記の用いるスタンダードな言語をナイル世界の隅々にまで浸透させ、古代世界においては極めて高度な古代エジプトの教育システムの土壌を作り出したのである。しかし古代エジプトのあらゆる側面で中枢として機能してきた神殿であったが、その重要性も時代と共に失われていった。その後、古代エジプト文明の象徴であった神殿はその役割を終えたが、その神殿内で培われた文化＝知識は永遠に拡散を続け、世界各地に影響を与え続けたのである。

おわりに

神殿を中心とする古代エジプトにおける建築様式の発展は、建築技法、建築構造、各施設の配置、規模、などを考慮すれば、ギリシア・ローマ時代に頂点に達したと言える。そ

してエジプトの神殿は、時代と共にその特徴を発展させつつ進化した。そのためギリシア・ローマ時代のエジプトの神殿は、純粋な古代エジプト式の神殿の延長線上にあったのである⁷⁵。それではこのような神殿建設の伝統を持つ古代エジプト文明とはいつその終わりを迎えたのであろうか。現在世界中の大学で行われているエジプト学講座でなされているように、古代エジプトの歴史は、先王朝時代から始まりプトレマイオス朝で終了したと単純に言えるのであろうか。本論で採り上げたように神殿とそこで行われた高等教育に重きを置けば、文字の習得というものが古代エジプト社会において最重要課題の一つであったことがわかる。紀元後390年以降ヒエログリフが使用されなくなり、続いて5世紀に入るとデモティックの使用も終わる。イングランドのサットン・フー Sutton Hoo で発見された青銅製のコプト杯⁷⁶ やその後もルネサンスや近代美術の中に現れる古代エジプトの文化的影響は、現代世界においても伝播・拡張を続けているが⁷⁷、古代エジプト最大の特徴とも言える文字の使用の終了と共に古代エジプト文明は終わったのだと言えるかもしれない。

ペルシア帝国による支配でもなく、アレクサンドロスの到来でもなく、クレオパトラ7世敗北後のローマ帝国のエジプト支配でもなく、紀元後391年のローマ皇帝テシオドスの命により知識の核としての神殿が閉鎖されたことが地中海世界の雄たるエジプトの文化的衰退をもたらしたのである。紀元後4世紀、三千数百年以上にも渡って栄えた古代エジプト文明は神殿の閉鎖と共にその終焉を迎えたのである。

注

- 1 本論で用いる「教育」という言葉は「哲学」とは異なり、もう少し明確な、現代世界においてできえ通用する実学としての「教育」という意味を持つものとする。そしてその対象は庶民レベルにまで及ぶものとする。
- 2 横尾壮英編『西洋教育史』、福村出版、1978年；長尾十三二『西洋教育史』、東京大学出版会、1979年；堀内文三郎『ギリシャ先史時代の文化—ギリシャ教育の源流—』、北樹出版、1996年、1頁。
- 3 ギリシア以前の教育については、F. Reichmann, *The Sources of Western Literacy: The Middle Eastern Civilizations* (Westport, 1980), pp. 3-153；H. I. マルー著、横尾壮英、飯尾都人、岩村清太共訳『古代教育文化史』、岩波書店、1985年の序説、あるいはW. V. Harris, *Ancient Literacy* (Cambridge, 1989)を参照。
- 4 辻本雅史・沖田行司編『新体系日本史16教育社会史』、山川出版社、2002年、vi頁。
- 5 例えば以下の研究のような手法もある。明神聰「古代ギリシア叙事詩『イーリアス』—詩人と女神の対話(ヨーロッパ)—」、川田順造、山本吉左右編『口頭伝承の比較研究(3)』、弘文堂、1986年、144-157頁；W. J. オング著、桜井直文、林正寛、糟谷啓介共訳『声の文化と文字の文化』、藤原書店、1991年、20-69頁；梁川洋子「中世後期イングランドの国王入市式と王権」『史遊』第7号(1999)、1-22頁。
- 6 M. Lichtheim, *Ancient Egyptian Literature* Vol. 3 (London, 1980), p. 199. インシンガー・パピルスについては以下の書を参照。Lichtheim, *Late Egyptian Wisdom Literature in the International Context: A Study of Demotic Instructions* (Göttingen, 1983), pp. 107-234.
- 7 R. M. Janssen and J. J. Janssen, *Growing up in Ancient Egypt* (London, 1990), p. 68.
- 8 作者が本文中で読み手として設定している自分の息子や後継者に対して、自らの経験を通しての教訓やそれに伴う智慧と処世術を述べたものである。
- 9 R. O. Faulkner et al, *The Egyptian Book of the Dead* (Hong Kong, 1994), plate. 2.
- 10 Lichtheim, *Ancient Egyptian Literature* Vol. 2 (London, 1976), p. 139.
- 11 Ibid., pp. 152-155.

- 12 W. K. Simpson (ed.), *The Literature of Ancient Egypt: An Anthology of Stories, Instructions, and Poetry* (New Heaven, 1973), p. 259; Lichtheim, *op. cit.*, (1976), p. 158.
- 13 基本的に公的な教育を受ける機会を得ることが出来たのは男子だけであった。
- 14 古代エジプトの数学については以下の書を参照。高崎昇『古代エジプトの数学』, 総合科学出版, 1977年; A. B. Chace 著, 平田寛, 吉成薫訳『リンド数学パピルス: 古代エジプトの数学』, 朝倉書店, 1985年。
- 15 書記自身は税を免除されていた。
- 16 J. Baines, Literacy and ancient Egyptian Society, *Man* 18-3 (1983), p. 580. 書記に関する肩書各種については以下の文献を参照。P. Kaplony, *Die Inschriften der ägyptischen Frühzeit* II. Band (Wiesbaden, 1963), p. 1215.
- 17 Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts* (Warminster, 1969), p. 164- § 954.
- 18 吉成薫「社会道徳の発見 — 古王国時代末・第一中間期の思想」, 屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』, 同成社, 2003年, 142頁。
- 19 Lichtheim, *Ancient Egyptian Literature* Vol. 1 (London, 1975), p. 101.
- 20 Baines, *op. cit.*, p. 581.
- 21 Simpson (ed.), *op. cit.*, p. 334.
- 22 *Ibid.*, pp. 330-336.
- 23 Lichtheim, *op. cit.*, (1975), pp. 18-23.
- 24 Baines, *op. cit.*, p. 580; Janssen and Janssen, *op. cit.*, p. 70.
- 25 カルロ M. チボラ著, 佐田玄治訳『読み書きの社会史』, 御茶の水書房, 1983年, 25頁。
- 26 N. Lewis, *Papyrus in Classical Antiquity* (Oxford, 1974), plate. 8.
- 27 秋山学「地中海世界における書物と書物観 — 古代から中世まで」, 宮下志朗, 丹治愛編『書物の言語態』, 東京大学出版会, 2001年, 12頁。
- 28 拙著『古代エジプト文化の形成と拡散 — ナイル世界と東地中海世界 —』, ミネルヴァ書房, 2003年, 第九章参照。
- 29 古代ローマの社会状況については以下の文献を参照。南川高志「ローマ人の社会と教育」, 比較法制研究所編『Justitia』第1巻 (1990), 157-169頁; 本村凌二『ポンペイ・グラフィティ』, 中央公論社, 1996年。
- 30 P. G. Guzzo and A. d'Ambrosio, *Pompei* (Napoli, 1998), p. 126; 本村凌二「ローマ人の読み書き能力」, 宮下志朗, 丹治愛編『書物の言語態』, 東京大学出版会, 2001年, 31-50頁。
- 31 箕輪成男『パピルスが伝えた文明 — ギリシア・ローマの本屋たち —』, 出版ニュース社, 2002年, 67-68頁。
- 32 青柳正規『トリマルキオの饗宴 — 逸楽と飽食のローマ文化 —』, 中公新書, 1997年, 46頁。
- 33 中世以前のヨーロッパの教育については以下を参照。ピエール・リシェ著, 岩村清太訳『ヨーロッパ成り期の学校教育と教養』, 知泉書館, 2002年, 3-40頁。
- 34 カルロ M. チボラ, 前掲書, 32-33頁。
- 35 ピエール・リシェ, 前掲書, 337-338頁。
- 36 ロジェ・シャルテイエ, グリエルモ・カヴァッロ編, 田村毅他訳『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』, 大修館書店, 2000年, 116-117頁。
- 37 J. Stevenson, Literacy in Ireland: the Evidence of the Patrick dossier in the Book of Armagh, in R. McKitterick (ed.), *The Uses of Literacy in Early Mediaeval Europe* (Cambridge, 1992), pp. 1-35.
- 38 酒井昭廣「識字率と産業革命」『社会経済史学』vol. 49 (1983), 58頁。
- 39 D. Cressy, *Literacy and the Social Order* (Cambridge, 1980), p. 136; 酒井昭廣「西洋近代における識字率と工業化」『大阪大学経済学』第42巻 (1993), 125頁。
- 40 M. Fleury and P. Valmary, Les progrès de l'instruction élémentaire de Louis XIX à Napoleon III, *Population* 12 (1957), pp. 80ff.
- 41 カルロ M. チボラ, 前掲書, 3頁, 61頁の第5表参照。
- 42 西中村浩「帝国ロシアにおける間文化と民族」池田信雄, 西中村浩編『間文化の言語態』, 東京大学出版会, 2002年, 36-37頁。
- 43 Cressy, *op. cit.*, p. 177; 酒井昭廣「イギリス近代における識字率 — 署名能力に関する研究について —」『大阪大学経済学』第33巻 (1984), 96頁。

- 44 ジョスリン・マーレイ編, 日野舜也監訳『図説世界文化地理大百科』, 朝倉書店, 1999年, 98頁。
- 45 E. Le Roy Ladurie, *Les paysans de Languedoc* (Paris, 1966), pp. 346-347.
- 46 アラン・コルバン著, 渡辺響子訳『記録を残さなかった男の歴史 — ある木靴職人の世界1798-1876 —』, 藤原書店, 1999年。
- 47 神官文字と訳されるが, 神官だけが使用していたわけではない。また主に公的な宗教文書や書記の練習用に使用された草書体のヒエログリフ (Cursive Hieroglyphs) の存在も知られている。
- 48 Lewis, The Demise of the Demotic Document: When and Why, *Journal of Egyptian Archaeology* 79 (1993), pp. 276-281.
- 49 アルベルティーン・ガウアー著, 矢島文夫, 大城光正訳『文字の歴史 — 起源から現代まで —』, 原書房, 1987年, 167-169頁。
- 50 Baines, *op. cit.*, pp. 572-573.
- 51 J. L. Foster, *Love Songs of the New Kingdom* (Austin, 1974); A. Erman, *The Ancient Egyptians: A Sourcebook of their Writings* (Gloucester, 1978).
- 52 Baines and C. J. Eyre, Four Notes on Literacy, *Göttinger Miszellen* 61 (1983), pp. 65-96.
- 53 I. Shaw and P. Nicholson, *The British Museum Dictionary of Ancient Egypt* (London, 1995), p. 164.
- 54 男性による代筆の可能性も指摘されている。
- 55 M. ビアブライヤー著, 酒井傳六訳『王の墓づくりびと』, 学生社, 1989年, 103-105頁。
- 56 Janssen and Janssen, *op. cit.*, p. 67.
- 57 A. H. Gardiner, The Mansion of Life and the Master of the King's Largess, *Journal of Egyptian Archaeology* 24 (1938), pp. 83-91; *ibid.*, The House of Life, *Journal of Egyptian Archaeology* 24 (1938), pp. 157-179.
- 58 増田精一「古代オリエントにおける神殿の形成」『社会文化史学』第26号 (1990), 12-13頁。
- 59 拙稿「ポンペイにおける古代エジプト文化の影響について — ポンペイ壁画第3様式と「エジプト化の時代」 —」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第17巻 (2000), 1-22頁。
- 60 J. S. Curl, *Egyptomania — The Egyptian Revival: a Recurring Theme in the History of Taste* (Manchester, 1994), p. 28.
- 61 拙稿「パルミラにおける古代エジプト文化の浸透 — 東南墓地F号墓出土のサテュロス型建造碑文からの一考察 —」『駒沢史学』第63号 (2004), 1-24頁。
- 62 「書物の家」と呼ばれていた壁にパピルスの巻物を置くことが可能な図書館に類似する施設もあった。
- 63 R. J. Williams, Scribal Training in Ancient Egypt, *Journal of the American Oriental Society* vol. 92-2 (1972), pp. 220-221.
- 64 エヴジェン・ストロウナル著, 内田杉彦訳『古代エジプト生活誌』下巻, 原書房, 1996年, 199-200頁。
- 65 「学校」という単語は第10王朝に初めて現れる。R. J. Williams, Scribal Training in Ancient Egypt, *Journal of the American Oriental Society* vol. 92-2 (1972), p. 215.
- 66 Shaw and Nicholson, *op. cit.*, p. 90.
- 67 Williams, *op. cit.*, p. 219.
- 68 ロザリー・デイヴィッド著, 近藤二郎訳『古代エジプト人 — その神々と生活 —』, 筑摩書房, 1986年, 169-170頁。学校への入学年齢やその授業期間は, 個人によってバラつきもあり, 神官バクエンコンスは5歳で入学し, 16歳でウアブ神官に任命されたことが彼の方形彫像に刻まれている。Janssen and Janssen, *op. cit.*, p. 72; エヴジェン・ストロウナル著, 内田杉彦訳『古代エジプト生活誌』上巻, 原書房, 1996年, 71頁。
- 69 Janssen and Janssen, *op. cit.*, pp. 84-85. ただし実際に彼女が使用したのかどうかは不明である。
- 70 Lichtheim, *op. cit.*, (1976), p. 141.
- 71 Janssen and Janssen, *op. cit.*, p. 85.
- 72 拙著, 前掲書, 103-125頁; 近藤二郎監修, 近藤二郎, 大城道則, 菊川匡共著『古代エジプトへの扉 — 菊川コレクションを通して』, 文芸社, 2004年, 127-128頁。
- 73 杉勇, 三笠宮崇仁編『古代オリエント集』, 筑摩書房, 1978年, 640頁。
- 74 同, 641頁。
- 75 ジョン・ベインズ著, 中野智章訳「古代エジプトの神殿」『南山大学人類学博物館館報』第26号 (1992), 2頁。

- 76 T. Champion and P. Ucko, Introduction: Egypt Ancient and Modern, in Champion and Ucko (eds.), *The Wisdom of Egypt: changing visions through the ages* (London, 2003), p. 13-fig. 1: 2.
- 77 B. A. Curran, The Renaissance Afterlife of Ancient Egypt (1400–1650), in Champion and Ucko (eds.), *op. cit.*, pp. 101–131; D. B. Haycock, Ancient Egypt in 17th and 18th Century England, in Champion and Ucko (eds.), *op. cit.*, pp. 133–160.